あさ 1

2021

山巡り　　須賀忠男

常念岳 2,857m
松本市の西にピラミットの型に
見える山.
大きな岩がゴロゴロ?
している頂上に祠がある。
燕岳~常念岳~蝶ケ岳~上高地と
3泊4日の縦走! 楽しかったー

あを

一月集

新春詠［壱］ほか

佐藤喜孝

赤星天道七星瓢蟲（てんたう）日だまりに

綾なす初日奈良の疎水のみなそこに

源氏名のやうな俳號藤の花

純米酒やら大吟醸やらあを柳

人の日や直立猿人に如かず

よろこびのひろがりてゆく泉哉

舊知なる泰のつばくろ目で追ひぬ

*

初み空鴉と妻は顔なじみ

冬の入り

七郎衛門吉保

熊の出て猿の隠れて里の畑
冬蝶となり舞ひ踊る石榴の葉
煩悩の数のごとの実ピラカンサ
スニーカー白から赤に冬衣
冬日差す妻入院と夫の家事
妻の肺メスが入るも冬菫
大根の輪切りに透ける宇宙かな
大根をステーキにして令和なり

未開の奥地

篠田　純子

脳内に未開の奥地日向ぼこ
郁子の実や第二火曜の傳句会
冬日向交差免疫獲得中
博品館にバイデンのお面冬立てり
銀杏の実切り口上のペッパー君

「新社員」抄（四）

篠田　大佳

絵日記の「たいひくんれん」冬木立
極月や看板猫のまるまると
書きかけのメッセージ消し御慶かな
配達員表情のなく初御空
中学生寝癖立たせて二日かな

石蕗の花

須賀　敏子

ささやかな旅の始まり石蕗の花
距離をとり言葉少なに紅葉狩
ひらひらと朝日の中に欅散る
冬めく日微かな不安映画観る
冬夕焼静かにビルのシルエット
ベランダに立てば雲なく月冴ゆる
老木に今年も撓わ柚子ひかる
擦れ合って庇少しある柚子を捥ぐ

冬の坂

田中　藤穂

落葉舞ひコロナの街は人けなく
山茶花は今まっさかり寺の山
順調に術後回復冬の窓
杖なしに歩くリハビリ冬ぬくし
追ひつけぬ息子の歩調冬の坂

湖

長崎　桂子

晩秋の多彩な湖畔水鏡
エンジン音の木霊晩秋の湖
山裾の秋の花畑あでやか
サルコペニア防ぐ筋トレの夜長
来し方の気温あれこれ木の葉髪
行く秋の二見浦の入り日かな
鯊日和串焼く辺り暮れ残る
癒されて厨あれこれ後の月

卵茸

森　なほ子

銀杏黄葉駅舎の屋根は赤く塗る
刈田延々地図の通りに行けば駅
制服の昔は林檎丸噛り
神々の庭てふ山の雪化粧
後手に野に佇めば愁思形
大綿を潰さぬやうに服払ふ
派手好みなれど良き人卵茸
馬追は精密機械かもしれぬ

入院

赤座典子

温かき栗飯勤労感謝の日
今日は寒しと看護師の云ふ朝六時
冬の夕ほいほい帰る若き医師
点滴の跡薄らぎぬ小六月
冬薔薇退院祝ふ淡き色

晩秋

秋川　泉

臍を出し転げ遊ぶ子秋日和
誰かゐる猿の腰掛け巨大なり
カーナビの遠廻りある夕時雨
腕組みししばし思案のインバネス
検査日の雨降る道や秋深し
お礼にと渡しそびれし蜜柑かな
すっと立ち夕日に映える杜鵑草
猫道をたどりて角に茶の木咲く

十一月号作品より　赤座典子・七郎衛門吉保・佐藤喜孝

こぬか雨突いてひととき秋のてふ　　佐藤喜孝

先の見えない日々を、私達は動かずに過ごしているが、他の生き物は、異変を感じていないのであろうか。我が家のベランダには、ヒヨドリが毎日きちんと、果物を刻んだ餌を食べにくる。この季節まで生き残った蝶も、小糠雨を突いてまで作者のもとへ訪れるという。例え一時でも、とても慰められる。きっと明日も飛んできてくれる。（典子）

画布伸べて夫は九月で傘寿なり　　須賀敏子

須賀忠男さんの「あを」へのカットは、解説もとてもよく分かり、特に今のシリーズの色々な鳥は、知らないことが多く、毎号楽しみに読ませていただいています。以前伺った個展では、敏子さんのポートレートがとても素敵でした。これからのカットは、山がテーマになるそうですね。傘寿を迎えられ、ますますお元気にご活躍されることでしょう。（典子）

電話帳の友みなあの世風の盆　　田中藤穂

富山県八尾の風の盆。深夜、人通りの絶えた通りを、ひたすら踊り続けてやがて見え無くなる、この世のものではない景色でした。あの踊りの輪の中に、懐かしい人がいても、おかしくないと思える位でした。会えなくなった人を、忘れられないからでしょうか。（典子）

カンナ燃え好きなことだけする日かな　　森なほ子

思い立って今日は、好きなことだけをすることにした。一つのことだけで、一日かかるかもしれないし、色々と心に留めておいた、細々とした事が片付くかもしれない。外へ出かけることは叶わないが、何しろカンナだって、こんなに元気に咲いているのだから。と　なほ子さんの一日を、想像してみました。（典子）

直面の人と行き交ふ秋の雲　　篠田大佳

直面とは，能で面を用いず、素顔のままのこと、とある。この句では、マスクをしていない人として形容していると思える。殆どの人がマスクをしているその流れに、時々素顔の人を見かける。

まるで映画のように現れる顔のアップを、湧いては流れ、流れては消えていく秋の雲を、作者は見続けている。（典子）

口つける泉のごとく大梨に　　佐藤喜孝

自家製ジャム作りを始めて、二十年を過ぎようか。このことに関わり、日頃から果物への関心は、自ずと高くなる。中でも同一果物の品種改良が進み、その多品種化には、目を見張らされている。筆頭は蜜柑などの柑橘類、そして林檎と葡萄と続き、その次に梨がくる。梨はその大きさの変化が著しい。品種「新高」などは赤子の顔ほどに大きく重い。大梨の果汁の滴りが見えてくる。（吉保）

初栗の飯炊く朝ぞ張り切りて　　秋川　泉

長らく使っていた土鍋風の米炊き釜は、一・二合の少量炊飯に向いていたが、「初めちょろちょろ中ぱっぱ……」風にするのに、炊き上がりまで目を離せないのが難点だった。そこで少し贅沢な、最新式の電気炊飯器を購入した。スイッチオンして目を離せることは勿論のこと、その仕上がりの良さに只々感心。赤飯・混ぜご飯・お粥・何でも。次は栗ご飯を張り切って炊きたい。（吉保）

部屋片づけちゃんかちゃんかリモート盆踊　　篠田純子

ギリシャ語に由来したフランス語「オノマトペ」なる語を、何故常用しているのか。旧仮名使いなど日本語に拘る俳句界、誰が言い出しっぺなのだろうか。違和感を拭えないでいる。ところで、このオノマトペを巧みに取り込み、多くの作句をし、読み手を楽しませてくれている作者。今号の「ちゃんかちゃんか」「かたぐわた」も、日本語の擬声語の面白さを存分に取り込んだ句。（吉保）

モノクロに写るカメラや彼岸花　　大日向幸江

私のカメラ歴。一九五八年マイカメラ購入・一九六六年新婚旅行に初カラーフィルム・二〇〇三年デジタルカメラに切り替え・二〇一五年35㎜版カメラ関連全処分・二〇一六年小型デジカメとスマホカメラの併用。デジカメは画像の色彩を、カラー・セピア・青色・モノクロ（白黒）などに設定出来たり、撮影後の画像を、編集機能でこれらに出来たりする。モノクロの彼岸花もいい。（吉保）

秋祭奉納提灯人疎ら　　長崎桂子

わが町清瀬は面積の四割が緑に覆われ、その約半分が畑などの耕作地。相当数の方が農業従事者

として、それを担われている。祖先からの営農を引き継ぐと共に、付随して発生する生活や習慣を引き継ぎ、一つの文化を形成している。田畑からの収穫に感謝し、それを祝うことから始まっている秋祭り。奉納提灯などにその一端を見て取れるが、提灯も人も疎らと、詠むのだろうか（吉保）

利酒に先づは限定ひやおろし　　赤座典子

酒は毎晩いただくが詳しくない。詳しくないといふよりただ飲んで楽しむ派。必要があって純米酒と吟醸酒の違ひを調べたくらい。「ひやおろし」もついでに調べた。「春にできた新酒を夏の間貯蔵し、秋から冬にかけて瓶詰めして出荷したもの。」と。解説を読むと秋の季語のやうだが歳時記にはない。典子さんは「ひやおろし」もさることながら「限定」に惹かれたやうだ。私も「限定」に弱い（喜孝）

金色の歌留多敷き詰む稲田かな　　七郎衛門吉保

季語は「稔田」になるのだらう。金色の歌留多を想像すると小判が並んだような豪華さだ。確かに米は江戸時代の貨幣の代わりをした。同時発表に「刈田道麒麟模様の見え隠れ」もある。吉保さんは楽しさうだ。こちらも楽しくなる作品。（喜孝）

炑収集

はつてふのやうにふるへて春のなね　佐藤　喜孝
野仏のうしろにつづく曼殊沙華　秋川　泉
冬銀河はやぶさ二号一直線　大日向幸江
太古から海の残り香山眠る
岳沢に影一つなく秋気澄む　七郎衛門吉保
テイラーのとなりバーバー秋の暮　篠田　純子
秒針の張詰めてをり初句会　篠田　大佳
間引菜のひとかたまりや直売所　須賀　敏子
台風来三宅島いま豪雨とか　田中　藤穂
衰へを夏の疲れといたはられ
帽子とりコスモス越しに道をきく
ゆるり行くちらほら淡い秋の色　長崎　桂子
昨夜の雨木犀の花地に香り　森　なほ子

旗日と言ふ人と出掛ける文化の日　赤座　典子
さはやかや三冠牝馬凛と立つ　秋川　泉
桃色に春待つ心箱に入れ　大日向幸江
八十路（悼）なる兄の歩みや鰯雲　七郎衛門吉保
パワハラの言葉に咲いた葉鶏頭　篠田　大佳
おやゆびにＴｏＤｏリストを消す暮秋
柚子坊を見て見ぬふりの昨日今日　須賀　敏子
送電塔先の先まで秋の空
お祭の金魚が育ち秋高し　田中　藤穂
白黒の昭和の回顧夜長かな　長崎　桂子
嘘つきの為政者ママコノシリヌグヒ　森　なほ子
文庫本厚き二冊を冬用意　赤座　典子

喜孝抄

佐藤喜孝

七郎衛門吉保

八十路兄あの世とやらに雁渡る
兄逝くやあれやこれやと冬の風
兄逝きてぽつと寒さの日々に増え

○おもはず口をついて出たやうな「あの世とやらに」に、亡くなられた兄への親愛の深さを知らされる。「雁渡る」に万感の念ひを托してをられる。
○この句も堅苦しい言葉を使はない。兄を亡くされて焦点の定まらぬ旬日。せねばならぬあれやこれやに振りまはされる。その間にも兄との様々なことが、走馬灯のやうにとりとめもなく浮かんでは消えてゆく。「冬の風」は平凡とも思へる季語だが、返って悲しみの深さを読む人に伝へる。
○そんな数日を経てふと、立ち止まった時、ああ本当のことだったのだなあと改めて思ふことである。三句とも季語の遣ひ方に感心した。

篠田大佳

冴ゆるかな海の記憶を持つ小石
鳥瞰の風のうるさし凍つる月
冬ゆやけ線路忽ち失せにけり

○「海の記憶を持つ小石」とは一に、海辺などで拾った思ひ出の石。一に大昔海底にあったプレートが隆起して山脈になった。地上に露出した石に読める。「冴ゆるかな」でどちらなのか考へた。後者に傾くが結論を出せなかった。手の平に乗せた小石が海の記憶を有してゐると云ふ発想に感心した。
○素直に読む。鳥瞰してゐる下界の風をうるさいとみる。見上げればそこには下界の騒ぎに拘はりのない凍月が凛としてある。事柄を読むうちは忖度の範囲で読めるが、心理・意識をテーマにすると読み手は忖度で読めなくなる。と少々弱気な私。
○今他誌で夕焼の句を採り上げた文を読んだところ。文中に

銃声を誘ふごとき夕焼なり　　奥坂まや
歩を進めがたしや天地夕焼て　　山口誓子

夕焼は季節を問はず確かに心昂る。夕焼が作者を領する。確たる道しるべであった線路がたちまち失せたといふ。作者の不安感を詠んだものか。

今月の三句、作者の心の中を詠もうと格闘してゐるやうに読めた。

須賀敏子

茶の花や十年振りの姉妹旅

冬の宿姉の語りし父母のこと

妹の丹精込めし大根引く

○十年振りの姉と妹の旅。お酒の入る男同士の旅と違ひ、ただただ美味しいものを食べ思ひ出を語り合って尽きない。季語「茶の花」は出しゃばらず句に寄り添って好もしい。

○姉の知ってゐる父や母のこと。妹の知らない父母のこと。妹は初めて聞く父や母のこと。問ひては語り、時の経つのもあっと云ふ間の冬の宿である。

○妹の育てた大根。瑞々しく葉を付けてゐる。大根の採り入れは一本一本畑から人力で抜く。機械化はされてゐるのかは知らない。立派に育った大根を抜く楽しい時を得た。大根は右回転しながら育つといふ。で抜く時も右に回しながら抜くと抜きやすいらしい。抜くのを「引く」といふのは面白い。

田中藤穂

木枯一号吹きしを知らず熟睡して

一日に食事は三度冬立てり

立冬や独り暮しの醤油買ふ

○先日、恐ろしいほどの風が吹いた。あれは木枯といふのだらうか。「春一番」に対して「木枯一番」とは云はず「一号」といふ。木枯一号も春一番も民間人が勝手にこれがさうだ、といふわけにはいかないらしい。木枯一号について気象庁は

「東京は気象庁予報部予報課の天気相談所、大阪は大阪管区気象台気象防災部予報課がそれぞれ発表する。東京においての木枯らしの条件は

一　期間は10月半ばから11月末までの間に限る。

二　気圧配置が西高東低の冬型となって、季節風が吹くこと。

三　東京における風向が西北西～北である。

四　東京における最大風速が、おおむね風力5（風速8m）以上である。

大阪においての木枯らしの条件は

一　期間 霜降（10月23日ごろ）～冬至（12月22日ごろ）まで。

二　気圧配置 西高東低の冬型の気圧配置。
三　風向・風速 北よりの風が吹き、最大風速８ｍ以上。

以上の条件を満たした風を「木枯らし」と認定する。そして毎秋最初の木枯らしを木枯らし一号として発表する。「木枯らし二号」や「木枯らし三号」も起こり得るが、発表は行われない。なお「木枯らし一号」は関東地方（東京）と近畿地方（大阪）でしか発表されない。一九九一年に現在の基準が採用され始めた。また、気象庁が発表をいつから発表を始めたか正確な記録がない。」とのこと。藤穂さんはいい眠りをした朝、ニュースで木枯一号が吹いたことを知った。木枯一号で一番古い記録は一九五一年十一月五日とある。

○《目は横に鼻は竪なり春の花 上島鬼貫》といふ当たり前過ぎることを堂々と云ひ放つ誹諧・俳句が訳知らず好きである。この句もさう。なぜか深遠な心理が内包されてゐるやうに私には見えるから好きなのだらう。人世の真理を悟り、泰然としてるやうに見える。穿ってゐるかに読める。掲句季語は何でも良ささうだがさうでもない。俳句はちまちました俗世からのさやうならである。開き直ると人は強い。　後日鬼貫の句には元ネタがあることを知った。禅語に「眼横鼻直」である。「がんのうびちょく」と読む。解説に

「眼横鼻直、読んで字の通り、あたり前の事実を、ありのままに見て、しかも、そのままである真実を領き取る。道元禅師でさえ四年の歳月がかかったのです。易しくて、難しい事実です。私達は果たしてすべてを、見るがまま、聞くがまま、あるがままに受け取っているでしょうか。」

「日に食事は三度」もさういふ目で見れば読みやうも変はる。これほど健康的なことはない。食事をおいしく頂けること、これにすぐるものはない。三度の食事が面倒になったらお終ひだ。

○子どものころ、母たちがご近所と味噌醤油の貸し借りをしてたとうっすらだが覚えてゐる。今は味噌や醤油はパッケージに入ってゐるが、その頃は量り売りではなかったらうか。現今は醤油のパッケージ一つとっても多種多様。魚醤だ雲丹醤油だと多様で買ふのに迷ふ。藤穂さんは昔と比べればおもちゃのやうな容器の醤油を需めたのだらう。醤油ひとつ買ふにもかの日のことが思ひ出されるこの頃である。

長崎桂子

うそ寒や空缶投げる不埒者
畦道に今朝は一輪帰り花
冬に入る貨車を利用の赤提灯

○子どものころ朝起きると私の仕事は家の前の道を掃くこと。溝があってどぶさらひもした。最近少なくはなったが、たばこの吸殻をまだ見かける。空缶が塀の上や植込みに捨てられてもゐる。桂子さんはその現場に行き合ってしまった。句中で「不埒者！」と云ひ少し憂さの晴れたことであらうか。読者の一人である私はすっきりした。

先日嫌な夢を見た。山道を歩いてゐる。食べてゐたミカンの皮を自然物だから土に帰るだらうと思いポイ捨てした。誰もゐないと確認したのだが茂みの中のあちこちに人がゐるではないか。山を降りて来たら注意しなければといふ声も聞こえてくる。以下略、嫌な目覚めだった。
○朝の散歩が畦道とは羨ましい。私もそんな生活にあこがれはいるが……。最盛期の花はもちろん目を引くが、帰り花は近寄ってみたくなる。一輪の帰り花を見かける充実した朝の散歩である。
○この句も魅力的なシチュエーションだ。廃車になった貨車に赤提灯が灯ってゐる。行き会ったら私は吸い込まれてしまふだらう。肌寒くなった冬の初めはことさらである。簡明な表現だが情緒がある。

森なほ子

戦後あり団欒の中に林檎あり
投げつけし言葉が淋しがる夜寒
手かざせば水の流るる文化の日

○物資窮乏の戦後の東京に燦然と輝いてゐた林檎。わたしの父は秋田の出。戦後まもなく父の兄がときをり林檎を送ってくれた。長方形の板で作られた箱の中には籾殻がびっしり。籾殻を掻き分けると赤いリンゴが顔を出す。いっとき豊かな気持ちになったものだ。今と比べて家族が肩寄せ合って暮らしてゐた。忘れかけてゐたことをこの句は思ひ出してくれた。
○言葉を「投げつける」のは異常な高まり。投げつけた言葉は本人や相手ではなく、使はれた「言葉」そのものが淋しがってゐるといふ。面白い視点である。相手に投げつけた言葉は巻き戻せない。本当に恐ろしいことである。『七さみだれ』（享保）に

いひ出す詞はとりも戻されず　　貞吾
おなじ家中（かちゅう）の臭も見しらぬ　　之仲

○公衆トイレで見かける。大事な用を足し手を出せば水が自動で出てきてくれる。用が済み手を引っ込めれば水は止まる。家庭でも欲しいものだ。順次この様になってゆくのだらう。今手洗ひの水栓のことを書いてきたが、この句は「かざす」「流るる」でおトイレそのもののこと。私のわがまま詠みでは、「手かざせば水の流るる春の野辺」。

赤座典子

窓越しの垣の山茶花紅濃くて
冬の空羊の一団粛々と
ひとしきり裸木揺らす鳥細身

○投稿紙の脇に手術後の様子が書かれてあった。十二月十六日のスタンプがある。「快調に退院したが原因は分からぬ痛みがあり……」。体調不良のご様子の中の投稿である。花はいい。嫌はれる花はあるのだらうか。ガラスの向かうの山茶花垣の花の色にこころをやる作者である。
○このごろ時間が出来たせいか年のせいか、空を見ることが多くなった。先日もマンタのやうな大きな雲が空を塞いでゐるのをほれぼれと眺めた。この句、「粛々と」で雲がゆっくり流れてゐる様がわかる。今、書いてゐるのが旧の十二月一日。日の出が6時51分。月の出が6時52分。太陽と月が同行してゐるらしいことにこの年になって知り驚いてゐる。
○窓から見える枯枝を揺らして去って行った鳥が細身であることを目にとめた。ひたすら眼前を虚心に見てゐる。眼横鼻直の心境である。

秋川　泉

蓋ひらきぱっと広がる林檎の香
のびのびと三毛猫ごろり落葉かな
夕暮れや十一月の風ふはり

○林檎は香りの強い果実の一つである。箱を開けたと同時に林檎の香が立ち上る。林檎の特性を掴

んでゐる。今私は「箱を開け」と書いた。この句の林檎の容器が「蓋」では見えてこなかった。
○野外で猫は思はぬところで寝てゐるのを見かける。ある時は塀の上で八つ手の葉に乗り、ある時は植込みの枯枝に乗りと変幻自在。季節によりボンネットに乗ったり、車体の下に潜り込んだりして居る。熟睡中の猫の耳元で大きな声を出して悪戯したことがあった。人もふかふかの陽だまりの落葉に横たはり芳香に包まれ転寝したいものだ。
○「物」がひとつもない俳句は難しい。座標点がないやうで据わりが悪い。河東碧梧桐に「無中心論」なる俳論があるが、この句には「や」で切られた中心がある。

「はしたて集」に駄文を添へ勉強させてもらってゐる。一人三句に向き合ひ作者と作品と会話する。一人書き終るとさっと次の人に移れない。一人ひとり全く違った個性、語り口を持ってゐる。理解できる句ばかりではない。表現の不備か、理解力の無さかと悩むときもある。と頭の切り換へに時間がかかる。以上遅筆の言い訳である。

私の仕事　大日向幸江

野鳥の朝は早い。日の出が始まる頃から活動が始まる。カーテン越しに見る外は雀・野鳩・カラスが居る。近くの公園に毎朝パンの食べ残しや古米などを蒔いてやる。やがて遠くから鳥達が飛んで来る。人間が活動する前の私の仕事。自然界に食べる物が出来るまでの私の仕事。

鵯　須賀敏子

我が家の西窓の近くに金柑の木がある。今年は多くの実を付け西日に輝いている。そろそろ食べ頃と思っていたら、やはり鵯がやって来た。一番美味しそうな実を啄む。私は慌てて収穫をする。大好きなジャムにするために。

鳥時計　田中藤穂

家の中に居ていろんな野鳥の声を聴かれるなんていいなと思って、ある時、鳥時計を買った。一時間毎にいろんな鳥が鳴くのだが、それは機械で作った合成音だったので私が期待した程ではなかった。それが鳴かなくなった時、電池を入替えて、鳥の声と時間を合せれば直るのだが、それが仲々むづかしい。やはり野鳥の声は森や山の中へ出向いて本物を聴くに限る。鳥時計は以来鳴かないまま私の前の柱にかけられたまま黙って時を刻んでいる。

ヒラヒー　秋川泉

どれくらい昔の事であったか……私が二十代の頃、寺を囲む林や森の若葉の美しい頃。まだ明けやらぬ薄暗い時間。森から清んだ高音の「ヒラヒー」「ヒラヒー」「ヒラヒー」と三度鳴く声。眠くてならない私の頭に刺さる声。心地良い眠りから一瞬で醒める。その日から三日間、同時刻に「ヒラヒー」は聴えた。

それが四日目にパタリと止み、その後一度も聴いたことがない。あの鳥は何だったのか。あれは鳥であったのか。今でも不思議でならない。鷽と云う鳥がいるが、それに一番似ているが、もっと清んで高温であったように思われてならない。

星鴉　佐藤喜孝

山歩きの娯しみの一つに野鳥の声がある。朝を告げる郭公。重くなった足を軽くしてくれる鶯。寝苦しい山小屋で聴く夜鷹。これらの鳥は一度で覚えられるが、ほかの鳥は聴き分けられなかった。そこでLPを買った。野鳥の声を集めた25センチといふ変型判。仕事中このレコードをかけ山野の風を感じたものだ。

よし覚えたぞと思って山に行く。実際に聴く野鳥はLP通りには鳴いてくれないのだ。黒鶫や三光鳥をこれだと確信を持って聴きたかった。

会へて嬉しかったのは星鴉。蓼科の森で出会った。恭子も喜んで句にしてゐた。

米栂をとびこし遥か星鴉　佐藤恭子

星鴉しづかに椴をとびたちぬ

筆

青楓米寿の女の筆のあと　森山のりこ
冬ぬくし写生の筆の良く動き　山荘　慶子
小さき手に筆持ち願ふ星祭　芝　尚子
身に入むや面相小筆ままならぬ　藤野　寿子
太刀魚の襷がけなる筆生姜　竹内　弘子
筆屋から孫が出てくる暮の秋　竹内　弘子
筆柿はみんな鴉にくれてやる　田中　藤穂
ここにも筆あそこにも筆冬籠　堀内　一郎
春風の軌跡か虚子の筆の文字　木村茂登子
硯洗ふ面相小筆ねむごろに　藤野　寿子
水引の花や出無精筆不精　芝　尚子
しっかりと筆持つ子供天の川　芝　尚子
美しき炎に祈る筆供養　木村茂登子
五十円葉書に筆字鶴来たり　大日向幸江
冬の川一筆書きの船の行く　大日向幸江
筆竜胆バス定刻で乗り遅れ　須賀　敏子

不定

更年期不定愁訴や猫柳　篠田　純子

ふと

装ひてふと袖口に秋匂ふ　河合　笑子
げんげ田やふと青春を思ふとき　鈴木多枝子
ふと命惜しきと立子秋の蝉　堀内　一郎
神の留守ふと旅に出て見たくなる　松村美智子
耳鳴りのふと止みにけり小夜時雨　芝　尚子
ふと見ると影と二人の夏の旅　関口　ゆき
小春日の父の背中にふと両手　佐藤　恭子
ふと見せる心の翳りバラ深紅　森山のりこ
雪螢宇宙の果てのことをふと　佐藤　喜孝
暮の春星の紛れにふと別れ　佐藤　恭子
ふと母をうとく思へり初しぐれ　篠田　純子
ふと仰ぐほどのお降り眼鏡拭く　鎌倉喜久恵
ふと触れし乳房つめたし春の風　須賀　敏子
柿若葉長椅子にふとまどろめる　田中　藤穂
春の宵ふと母の声聞くやうな　鎌倉喜久恵
春の宵ふときこえくる消防車　佐藤　恭子
ふと指のすすきの傷と氣づくまで　芝　尚子
秋霖の街ふとよみがへる母のこと　芝宮須磨子
紫木蓮肩の力のふと抜ける　森山のりこ
緑蔭のふと濃くなりて乳母車　芝　尚子
秋の夜やふとすれ違ふシャネルの香　森山のりこ
ふと出会ふ深山時雨を駈けぬける　佐藤　恭子
橋爪にふと立ちどまる雪女　佐藤　恭子
ふと思ふ図形は苦手花の冷　鈴木多枝子
鳴く蛙街中にふと一枚田　渡邉　友七
しゃりしゃりの対馬の西瓜ふと思ふ　赤座　典子

百日紅飛英のただなかふと見上ぐ　佐藤　恭子
劉生の絵をふと思ふ冬枯道　早崎　泰江
落柿舎をふと思ひ出す柿若葉　早崎　泰江
竹の脱ぐ皮に斑がありふと不安　定梶じょう
鶏頭に触れて伯母様ふと浮かぶ　長崎　桂子
芝居跳ねふと見上げれば春満月　須賀　敏子
ふとよりし店に見付けし種袋　山荘　慶子
青梅やふと舅姑を恋ふる日も　田中　藤穂
橋の上ふと聞こえたる「唐黍」と　佐藤　恭子

太い

太いのも細いのもある懸大根　栢森　定男

埠頭

埠頭一燈ともるや春の雪つつむ　定梶じょう

不動

赤葱売る深川不動お縁日　田中　藤穂
行き交ふ人皆善人に納め不動　芝宮須磨子
総持寺の黄不動現ず大いてふ　木村茂登子
不動への石段けはしはつ紅葉　篠田　純子

太き

夏の雲野太き声の竹竿売　鈴木多枝子
郎女の太き右腕野蒜ひく　佐藤　喜孝
飛魚に太きホースの真水掛く　佐藤　喜孝
節太き指みえかくれ花八つ手　赤座　典子
甘茶飲む太き梁ある庫裏にぬて　須賀　敏子
南方で太き蛇喰ふひとつばなし　篠田　純子
天高し大き佛に太き指　篠田　純子
太き鰤耀りて木箱にをさまらず　鎌倉喜久恵
沼五月威厳保ちし太き鯉　芝　尚子
沖縄の太き海雲が咽とほる　竹内　弘子
秋霖に逝くテノール歌手の太き咽　鈴木多枝子
植木屋の手土産太き白菜漬く　赤座　典子
冬毛太き尾をもてレッサーパンダ立つ　竹内　弘子
春埃米軍ヘリの太き腹　篠田　純子
細き人太き人にも夏来る　須賀　敏子

不徳

葱刻む不徳許せし人の居て　須賀　敏子

太く

みたらしの太く溢れて春の水　鎌倉喜久恵
菜の花や川細くなり太くなり　早崎　泰江
番傘に太く宿の名春の雪　鈴木多枝子
刻満ちて春汐うねり太くせり　鎌倉喜久恵
朱印帳墨痕太く枯葉寺　田中　藤穂
隣子の声太くなり春の風　斉藤　裕子
白と青太く鮮か葱を焼く　長崎　桂子

ふところ

牡丹の咲き満つ風をふところに　渡辺　友七

あとがき

あけましておめでとうございます。

一月号はこのやうな書き出しであとがきを書き出すが、これほどの遅刊では挨拶しにくい。心の平衡を保つため新暦、旧暦とダブルスタンダードで暮してゐる。で何とかあとがきが書ける。

数カ月前、マウスの使ひ過ぎか右肩がどの位置にしても痛くなった。急遽左手にマウスを使はせた。キーボードも左手の一本指で過ごした。おかげで近頃楽になった。

扉

須賀忠男さんの「野鳥」シリーズに続き今年も止まシリーズでお世話になる。活字で埋め尽くされた誌面に花を添へて頂いてゐる。感謝。

月

高齢のためか睡眠時間が不規則。日付が変るころ目を覚ますことが多い。満月の頃は枕上の窓を開けるとそこに月がある。寒いのですぐ窓を閉め軽い本を読むことが多い。軽いのは内容もだが蒲団の中で読むので大方文庫本にしてゐる。ひとりの気に入った作家を見つけるとその人ばかり読む癖がついた。家にある文庫本は非常に活字が小さい。あまりに読みにくいのでひたすら図書館のお世話になってゐる。

俳誌「六花」に〝「やちまた」読了〟と前書の句があった。図書館にあったので早速借り出した。足立巻一著の分厚い文庫本。内容は本居宣長の息子「春庭」のことが書かれてゐた。春庭は途中失明しながらも、日本語の文法を明らかにした先駆者。本も厚かったが内容も熱かった。久しぶりに読書をしたと言ふ気分に浸った。（喜孝）

二〇二一年一月号（2刷）
発行日　一月二十四日
発行所　東京都中野区中央2-50-3
電　話　090　9828　4244
ファックス　03　3371　4623
印刷・製本・レイアウト　竹僊房
カット／須賀忠男・福井美佐子・ティリ　エイマ
表紙・佐藤喜孝
会費　一〇〇〇円（送料共）／一年
ゆうちょ銀行（普）（店番 018）4586402
佐藤　喜孝（サトウ　ヨシタカ）